

アリス・ウォーカー : 闘う女神

KUSUMOTO, Kimie / 楠本, 君恵

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei University of Tama / 法政大学多摩論集

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2008-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003034>

アリス・ウォーカー

——闘う女神——

楠 本 君 恵

序

アリス・ウォーカーは黒人作家である。登場人物のほとんどは黒人で、黒人の世界を書いている。なのに、黒人を感じさせない人間の、しかも、女でなければ書けない人間とこの世の全ての生あるものの、「真実」が書かれている。愛を前面に出し、世の不正と闘った女性作家アリス・ウォーカーの闘いの諸相を探ってみたい。それはとりもなおさずアリス・ウォーカーが自らに課した作家の役割りを解くことになるからである。

作家の役割

作家に、「あなたはなぜあのようなものを書くのですか」と聞いて、「私は自分が読みたいものを書くのです」と答えられた時ほど、煙に巻かれた思いをすることはないだろう。「読みたいもの」の意味は、人により千差万別だろうと思うからである。だが、黒人女性作家アリス・ウォーカー (Alice Walker, 1944-) は、同じ黒人女性作家でノーベル賞受賞者のトニ・モリソン (Toni Morrison, 1931-) がそう答えたとき、その答えを即座に理解し賛同を表明している。アリス・ウォーカー自身まさに自分の読みたいものを書いてきたからだ。だから、同じ黒人女性作家であるトニ・モリソンの読みたいものが推測できたのだ。そして、これらの作家によって書かれた作品が人々を感動させた。私もその一人だ。女性として、人間として、おそらく非白人として。

アリス・ウォーカーは、トニ・モリソンが自らに書く使命を課したのは、「受容されている文学」がしばしば性差

別や人種差別を平気で認めている現状が黙認できないから、文学という形で自分の考えを提示し、身をもって模範となろうとしたことだと理解した。

『母たちの庭を探して』(In Search of Our Mothers' Gardens, 1983) 所収の「あなた自身の生を救う」というエッセーでアリス・ウォーカーはわかりやすい言葉でそれを述べている。

ジェーン・エアや、その作者をどんなにすばらしいと思っても、黒人として私は、自分をそのどちらとも完全に同一視できない。それに、読みながら、つい歴史を思い起こしてしまうので、ヒースクリフは、嵐が丘からはるか離れた新世界アメリカで、キャッシーの目をくらませるほどの財産をどうやって築いたのかと、考えるだけで身がすくむ。^①

黒人である自分たちには、欧米の白人作家が作品に描かなかった部分まで見えてしまうから、どうしても作品をそのままの形で受け入れられないと言っている。引用された『嵐が丘』(Wuthering Heights, Emily Brontë, 1847)は、出生不明の孤児ヒースクリフの復讐劇である。孤児ヒースクリフは育ての親の一人娘キャッシーに恋をするが、周囲に邪魔されて裏切られ、出奔し、三年後に大金を持って舞戻る。ヒースクリフが英国に上陸し、船出した港町リヴァプールはプリストルと並んで忌まわしい奴隷貿易によつて発展した町だ。それは、リヴァプールを出港した船の四分の一が奴隷船だったという事実を上げるだけで十分だろう。王侯貴族まで競って投資しその利益をむさぼっていた血なまぐさい商取引の実体を考えた時、ヒースクリフがその大金をどこでどうして手に入れたかは容易に想像がつく。だからアリス・ウォーカーは、「身がすくむ」という言葉を使ったのだ。白人でない私には、その嫌悪が理解できる。黒人として、女として、アリス・ウォーカーは、作家の役割は「人間の、自分たちの生を救うことだ」と自分の立場をはっきり表明し、その目的のために筆を進めた。黒人女性作家としての自分の役割を次のようにうたう。「歌え

ない」という詩の最初の三行だけあげてみよう。

もし私たちが自分の生を救えないのなら

芸術家とは

何か^②

楠 本

また、『母たちの庭を探して』所収の「もし現在が過去に似ていたら、未来はどうなんだろう」というエッセイで、抑圧社会で抑圧者が勝手にふけるあらゆる幻想は、被抑圧者には破壊的である。ゆえに作家の義務は、他人の幻想を書かないことだ、と述べている。また、奴隷解放直後の一八六七年にウィリアム・ウェールズ・ブラウン（William Wells Brown）が書いた（*Cloelle, or the Colored Heroine, 1867*）『クローテル・黒人の主人公』の一部を引いて、奴隷制時代の黒人女性の大半が白人の愛人になってきれいな服を着たがっていた、というような文章を書く作家を強く非難している。どんな黒人女性であろうと、女主人の冷たい仕打ちを受けながら、同胞を鞭打ち、愛する肉親を売り飛ばす白人奴隷所有者の「愛人」にされて幸せなはずがない。こういうステレオタイプの解釈で書かれた作品は、アリス・ウォーカーには読むに耐えないものだったに違いない。

この小論では、「生を救う」とはどういうことか、また、アリス・ウォーカーが作家としての使命を果たそうとして掲げた高い理想をどのような形で表わしているかを作品を通して明らかにしていきたい。

一章 作家としての活動環境

1. 男性黒人作家からの攻撃

アリス・ウォーカーが世に出る一、二世代前の黒人文学の世界を見てみよう。初期の黒人作家の作品には、色の薄い黒人が書かれた。読者が白人だったため、少しでも読者の共感を得られるのはそういう黒人である必要があったからだ。だが、一九二〇年代から三〇年代のハーレム・ルネッサンスにより、黒人作家はようやく「黒い」黒人を書けるようになった。この時代、リチャード・ライト (Richard Wright, 1908-60)、『ラルフ・エリソン (Ralph Ellison, 1914-94)』ら筆力ある作家の衝撃的な抗議小説によって、黒人作家が大きくその存在を認められるようになった。アメリカ社会の中で長いこと人間として認められなかった黒人が (対等の) 人間として認められるようになるには、白人たちと関わり合いを持たなければならなかった。名誉の殿堂に肖像画の飾られているブッカー・T・ワシントン (Booker T. Washington, 1856?-1915) のように屈辱を忍んで「白人に喜ばれる黒人」になるうとしない限り、彼らは白人社会と闘わなければならなかった。

だが、抗議小説では、黒人作家が迫力ある緻密な筆で描いた黒人たちは、死に追いやられるか、社会のアウトサイダーになっていくしかなかった。リチャード・ライトの『アメリカの息子』 (Native Son, 1940) の主人公ビッガーは、運転手として雇われていた白人家庭のお嬢さんを不可抗力で殺してしまったことから、逮捕され、裁判の結果死刑になる。普通の人生を送れたはずの青年が、白人社会の黒人に対する偏見 (黒人の男は常に白人女性を犯そうとしているという) のゆえに、罪を犯し、抵抗むなしく死に追いやられてゆく。

ラルフ・エリソンの『見えない人間』 (Invisible Man, 1952) の主人公は、黒人が「何者でもない」白人社会で自己を探求するが破滅し、地下に潜る。無人になったまま放置されている工場の地下室をめぐらし、何千個という電球を盗んで灯し、文字通り、見えない幽霊のような存在になっている。他者や社会と繋がらない生は死と同じである。

もう一例上げると、リチャード・ライトの『アウトサイダー』(The Outsider, 1953)は、地下鉄事故で、誤って自分の名前が死者として公表されたのを機会に、自分を葬って(死者には人種はないということで、人種意識も同時に葬って)、社会から切り離された人間として再出発しようとする男の話である。男は、墓場で探した名前で別人になりすまして、現実世界とつながりを持つとうとするが失敗し、結局殺される。

これらの作家たちの迫力ある作品は、確かに世の中をあつと言わせた。だが、人は扱って生きる社会の基盤なくては生きられない。だから、こういうアウトサイダーの文学の行き着く先は、逃避か逃避を経由しての死しかない。

こういうものが当時の黒人作家の書きたかったもの、書かなければならないものだったのだ。白人たちに黒人の力を示し、実態を知らさなければならなかったからだ。しかし、これらの抗議小説と言われるものには限界があった。彼らにやや遅れて登場したジェイムズ・ボールドウィン(James Baldwin, 1924-87)は、『山に登りて告げよ』(Go Tell It on the Mountain, 1953)で、黒人一家の信仰と迷い・苦悩を描き、注目されて世に出てきたが、抗議小説の限界を察知していた。『ジョバンニの部屋』(Giovanni's Room, 1956)を発表したとき、世に衝撃を与えた。パリを舞台に男の友情とその亀裂を描いたもので、そこには黒人も黒人社会も描かれていなかったからである。ボールドウィンは、「万人の抗議小説」というエッセイで以下のように述べている。

抗議小説の失敗は、それが人生を、人間を拒否し、人間の美、恐怖、力を否定し、人間を黒白に分類することだけが、実際の、しかも絶対的な方法であると主張するところにある。^③

ボールドウィンは、死や、はみ出し者になることでは黒人の問題は解決しないと考えた。上記引用に続いて、「我々がしなければならぬことは、人生のために戦うことではない。それよりもずっと困難なこと、すなわち人生を受け入れることだけである」と言っている。

この主張が、とりもなおさず黒人女性作家の創作姿勢であった。アリス・ウォーカー、トニ・モリソン、マヤ・アンジェロウ (Maya Angelou, 1928-) から現在の黒人女性作家が、主張し、たたかれても跳ね返し、厳しい批判の中でそれぞれ確立していった世界である。これらの黒人女性作家たちは、人生を受け入れ、つまり自分たちのよく知っている社会に根を下ろし、母や祖母たちの代まで遡り、自分たちのよく知っている言葉で自分たちの知っている真実を書いた。内側から自分たちの世界を書くわけだから、当然、黒人として対抗する白人には見せたくないと思うような黒人の姿も描かれる。遅々として地位向上の見られないアメリカ社会の中で、依然として抗議小説こそ黒人文学の本質だと信じる黒人文壇からは、激しい反発があった。

だが、彼女たちより二世代ほど先に世に出たゾラ・ニール・ハーストン (Zora Neale Hurston, 1891-1960) は更に悲惨だった。袋だたきに遭ったのだ。ハーストンは、バナード大学の奨学金を授与されて、北部で勉強していた一九二五年ごろ (白人) 文壇からは「ハーレムで最も才能のある不遜な若い作家」と評判になった。しかし、彼女の発表した作品は黒人文壇の男性作家たちの怒りの渦に飲み込まれた。なぜ黒人の恥部をさらさなければならぬのか。目標を見誤るな。黒人の戦う相手は白人ではないか、と。「白人による人種差別を念頭に置いての黒人の文芸復興」というハーレム・ルネッサンスの風潮に合わない、と作品は無視され、絶版になった。黒人芸術家の責任は「人種抑圧と闘争を書くこと」で、女性は「この新しい運動を主導するのではなく」、その運動と芸術家に「愛情深い母性的な糧を与えること」が求められたのだ。^④

リチャード・ライトはハーストンの小説を「白人を笑わせるミンストレルの伝統を意図的に継続させ、黒人の生活を笑いと涙の、狭い世界に閉じこめている」と批判し、「この小説には何のテーマもメッセージもない」と述べた。^⑤ 『カラー・パープル』 (The Color Purple, 1982) の出版後、アリス・ウォーカーも黒人社会、特に黒人男性作家たちからの激しい攻撃を受け、酷評され、立ち直るのに久しい時間がかかったと述べている。ハーストンの作品を読み、その高い価値に気づいたアリス・ウォーカーは、同じ思いをした彼女に傾倒していった。フロリダの施設でひっそりと死

に、墓碑銘もない墓地に葬られたハーストンの墓を探し出し、彼女を文壇に蘇らせた。

2. アリス・ウォーカーを目覚めさせた偉大な先覚者

ゾラ・ニール・ハーストンは、世紀末の一八九一年フロリダに生まれた。作家であると共に民俗学者でもあって、フロリダのフォークロアやハイチのヴードー教を研究したものを残している。アリス・ウォーカーは、「信憑性のある」黒人の神話を求めてこれらの研究を探るうちに絶版になっていた二冊の本、ハーストン自伝『路上の砂塵』(Dust Tracks on a Road, 1942) と、『彼らの目は神を見つめた』(Their Eyes Were Watching God, 1937) に出会った。アリス・ウォーカーは、その斬新さに目を奪われたようだ。エッセー「ゾラに会いたい」によると、まずアリス・ウォーカーが感動したのは、そこに描かれた「健康な人種意識」だった。他の黒人の文学にはたいてい欠けている「複雑で完全な存在」としての黒人が描かれていたことだった。

また、ハーストンが自伝で語っている自分の恋愛経験、男女の関係についての考えにも引きつけられた。それは、現在の私たちにも通用する感覚である。完全に時代を先取りした目覚めた女性の恋愛観は、あの時代の黒人女性のものとは思われないほど解放されていて人間的だった。まず、ハーストンは大学時代の友人であった男との最初の結婚に失敗する。その原因は、彼女が結婚よりも仕事に魅力を感じていたからであったようだ。次に恋に落ちたのは、彼女と「手袋が手に合うように」ぴったり合った男性だった。優れた知性を持ち、強くて誠実で、彼女を心から愛し、献身的な愛を捧げてくれる相手だった。しかし、彼は、自伝中の言葉を借りると、「俺が先頭を走る。だから、柵の向こうから応援してくれ！」というような男だった。彼女は、何もかも自分でして、女性は結果のみ受け止めてくれというその「男らしさ」が納得できなかった。本文中から引用してみよう。

この男らしさは美しい、しかし、私たち二人を苦しめた。私の仕事が彼の理想を全うする邪魔になった。私に関

しては、葛藤はなかった。仕事は仕事、彼は残りの全てだった。でも、そのことを彼に分かってもらうことができなかつた。私の人生には彼以外のものがあつてはならなかつたのだ。^⑥

この女主人公の洞察の深さ、思想の新しさに注目してほしい。ここでハーストンが悩んでいるのは、性差別を問題にする現代の女性が、男性の意識の中で変えるのが最も難しく苦慮している問題ではないか。ここには自分たちが「黒人」であることも、「二級市民」であることも描かれていない。人間としていかに生きるかという悩みがあるだけだ。この野心と性衝動を前面に出した思想は、男性黒人作家が白人と対抗することを主眼とし、「男性に依存する弱々しい女性像」が理想とされていたハーレム・ルネッサンスの風潮に反した実に危険なものとして、男性作家の目に映つたのである。

アメリカ社会の中での政治運動については、ハーストンは次のような思想を持っていた。これが、公民権運動の起こる二十年も前の、黒人女性の発言だと考えると彼女の思想と行動がどんなに進んでいたかが分かる。彼女の意識には全く卑屈なところはなない。ハーストンがフロリダの密林を切り開いて創られたアメリカでただ一つの黒人だけの町イートンヴィルで、伸び伸びと育つたことが思想形成に大きく影響していたのだと思う。

私は、横並びの平等でなく、自由の上に上れる平等に大賛成だ。上に登れる人は登らせ、登れない人は、そのままそこに置いておくか、能力に見合ったレベルまで降りさせる。底辺にいて能力のある者は、一番上にいる弱い者から、いつでも梯子をひつたくることができる。そうあるべきなのだ。^⑦

ハーストンは、白人が主流を占めるアメリカ社会に向かって「同じ人間」として発言しているのだ。これが「黒人」の「女性」の発言だと思つたと改めてその勇氣に感心する。注^⑦で触れているように、これは余りに刺激的だとい

う編集者の配慮から、一九四二年版には掲載されなかった。

アリス・ウォーカーが「私にとつて一番大切な本」だというハーストンの『彼らの目は神を見ていた』(Their Eyes Were Watching God, 1937)は、決して目立つ特別の女性ではないが、ハーストンの思想を静かに浸透させたヒロインの登場する物語である。彼女は三回の結婚をし、三人目の夫を殺して故郷に帰ってくる。自分の人生を自分で切り開いていく、富や名誉ではなくて人生には何が大事かを知っている女性が自分に忠実に生きた物語である。アリス・ウォーカーを喜ばせた——黒人を特殊の人種としてではなく、自尊心と喜怒哀楽とを併せ持った普通の人間として描いたという意味で——画期的な物語だったのだ。どこが画期的であるか明らかにするために、少し長くなるが、筋を紹介してみよう。

祖母は、自分が育てた孫娘ジャーニーを、白人の投げた荷物を拾った黒人の男にその荷物を背負わされる「ラバのような黒人女」の地位から何としても抜け出させようと心に決めていた。年頃になるとたちまち男に狙われ、身ごもり、子供の世話に一生明け暮れるのが黒人女性に用意された人生だったからだ。

ジャーニーは、十六歳の時、まだ恋が何かも知らないまま金持ちの農夫に嫁がせられる。だが、会話もなく、妻を労働力としか思っていない夫に愛はわいてこない。半年余りの後、ジャーニーはフロリダで一旗揚げしようとする野心家のスタークスと家出する。

彼は、ジャーニーを妻とし、メイトランドの近くの黒人だけの町に土地を買って雑貨店を開き、やがてその町の市長になる。色の白いジャーニーは彼の権力の飾りだった。彼は、彼女にこの町で「名譽」を与え、「座って世間を見渡せる高い地位」を与えてやったのだが、ジャーニーは幸せではなかった。スタークスは、感謝もしないし、ありがたいとも思わない妻ジャーニーがおもしろくなかった。スタークスは、何年一緒に暮らしても妻を理解しようとしないう、理解できない男だった。

「女や子供や鶏や牛のことは、誰かが世話をしなくちゃダメなんだ。自分じゃほんとに何も考えないからな」と、

ジャニーの前で平気でいう男である。これは白人の奴隷所有者がさんざ奴隷に向かつて使った言葉ではなかったか。夫が病気にかかつて死ぬずっと前から、ジャニーの夫への愛は冷え切っていた。喪に服していた彼女のところに十四、五歳も年下の若者が現れる。ティーケイクという名前のこの青年はジャニーを愛し、何でも自分と同じことをさせてくれた。むしろ妻が積極的に自分と同じことをするのを喜んだ。ジャニーは狩猟の仕方さえも教わった。二人で出稼ぎをしていた村がハリケーンに襲われたとき、夫はジャニーを救おうとして犬に噛まれ、狂犬病を移された。看病中に狂った夫に襲われたジャニーは、最愛の夫を殺さなければならなかった。

このジャニーの生き方に共感したアリス・ウォーカーは「ジャニー・クロフォード」という詩を作った。^⑧

私はジャニー・クロフォードの生き方が好き

ジャニーをラバに

変えたがっていた夫も

女王になることに

興味を持たせようとした夫も捨てた

ジャニーの生き方が。

女は、服従しなければ

ラバでも

女王でもない

ラバのように苦しむかも知れない

女王のように歩くかも知れないが。

いくら家と土地を持った男（黒人の中産階級）に嫁いだとしても、労働力の一部としか考えられない、愛のときめきも感じられない相手との生活は、奴隷と同じだ。また、地位と名誉を与えられても、自分が夫の単なる「飾り」に過ぎず、自我を持った一人の人間として認めてもらえないのなら、やはり心は奴隷に過ぎない。ジャーニーにはどちらも捨てて自分の人生を求める勇気があった。一つは暴力による支配と労働と束縛による没個性、もう一つは夫の権力の飾りの代償として得られる安定と豊かさや名譽とを備えた没個性、これがジャーニーが二つの結婚によって得たものであった。後者は、特に私たち日本人には、妻の「献身」の見返りとして美化され、評価されているから、はつきりとしたマイナス要因として表に出てくることは少ない。事実この待遇に満足している女性は多いと思う。前者も特に黒人だけに特別のものではない。残念なことに今も世界中に同じ状況の女性がどれ程存在していることか。アリス・ウォーカーが感動したのは、この一般性を持つテーマの広さだったのだ。

3. 黒人女性の運命

アリス・ウォーカーは作家としての自分の使命は、ゾラ・ニール・ハーストンが拓いた道、つまり、「黒人」という特殊な枠でくくられない人間としての苦悩や感情を持った黒人を文学対象として描き、黒人女性の解放に向かって進むことだと悟った。あの悲惨な長い奴隷制時代を経た後に、生きている限り肉体的に精神的に搾取され続けてきた黒人女性の中に、ジャーニーのような女性がいたことに、正確には、このような高雅な思想を持った女性を創造する黒人作家がいたことに、ウォーカーは触発されたのに違いない。

黒人女性の想像を絶する悲惨な運命は、最初期の黒人解放の指導者フレデリック・ダグラス（Frederick Douglass, 1818-95）が『自伝』(*Narrative of the Life of Frederick Douglass*, 1845)で語っている黒人女性への暴力の実態をあげるだけで十分であろう。ダグラス自身奴隷だった。ダグラス少年は、毎朝柱に縛りつけられた若い美しい叔母が主人からむち打たれる音と悲鳴で目を覚ました。そして、叔母の背中から血しぶきが吹き出る光景を目にする。叔母の悲鳴が

上があれば上がるだけ鞭が飛ぶ。少年の目にも、主人はただ殴るために殴っているようにしか見えなかった。（『自伝』には書いてないが、暴力を加えられた後に、おそらく叔母は興奮した主人に犯されたのだらうと思う。）

黒人女性の被ってきた酷使の事実を裏付ける言葉を引用しよう。これが当時の社会、正確に言うと、白人男性社会の認識であった。

黒人女性は肉体的に強靱で、激しい動物的な官能性が滲み出ており、女性の劣等亜種とみなされていた。このイメージは黒人女性の経済的・性的搾取を容易なものとするようになった。……退廃のない奴隷制度は存在しない。それは体制の本質でさえある。……安価な労働力の必要性は、奴隷植民地にこれほどまでに品性の墮落をもたらすことになったのである。ナブコは、「奴隷資産のもっとも高い生産性は子供をもたらず腹である」と述べている。^⑩

本来愛の結晶として授かった子供を宿すはずの女性の身体が、人間的な愛も、尊厳も、母体への配慮もなく「産む道具」と見られる。しかも苦しみの代償として与えられるべき子育ての喜びが、我が子を地獄に送らなければならぬ永遠の拷問にすり替えられる。

奴隷農園主が、新たな奴隷を購入するよりも自家再生産する方が安価につくことに気づいた時、男たちは全ての徳を失った。「奴隷制度を論ず」というエッセーで、フレデリック・ダグラスは、奴隷州の法律によって三百万の人々が婚姻する資格を奪われている事実を述べ、ニュー・オリンズの奴隷市場にいけば、「ほとんど白人と変わらない女奴隷が、やがて売られれば、勤めねばならない呪われた目的をはっきりと示しているような値段で売買され」、その周りで「懐を金で膨らませた男たちが好色な目をぎらぎらさせながら、将来の性の犠牲者を眺めている」と書いている。^⑩

この長い悪夢の時代を生き抜いてきた黒人女性たちには、解放されるために是非突き破らなければならない何重もの厚い壁があった。

二章 黒人女性解放への道

1. 果てしない出産と子育てからの解放

奴隸制時代には子供を産む道具だった黒人女性たち、解放後も責任を取らない同胞男性の性のはげ口として、自分の意志でない妊娠を繰り返していた黒人女性たち、彼女たちをまず出産と育児という酷使から解放するのがアリス・ウォーカーの作家としての課題の一つだった。エッセー「母の庭を探して」で、奴隸時代の曾祖母たちは、体を開かれ、赤ん坊を（その後ほとんど売り飛ばされる運命にある）——八人、一〇人、一五人、二〇人と——生まなければならなかった、と言っている。女としてこれほどの拷問があろうか。欲しくもない子供を孕ませられる。たびたびの出産の恐怖と苦痛、それはまだ我慢できただろう。だが、我慢できないのは、自分の産んだ子供が自分から取り上げられる苦しみだっただろう。奴隸の母親は誰もが、その子供の将来に待っているのは、男の子は男の子の、女の子は女の子の地獄の苦しみではないということを知っているのだから。

確かに黒人の方が早熟だという傾向はある。奴隸制時代が終わった現在でも黒人の方が早くから大人の世界を体験している。ある調査によると、^①十五歳までに性体験を持った少女は、白人の二五・六％に対して、黒人は六八・六％と圧倒的に高い。また十八歳までに妊娠した少女は白人二〇・五％に対して、黒人四〇・七％とやはり倍近い。更に驚くのは、結婚歴のない女性千人あたりの出産総数が白人一二七人に対し、黒人は一〇二〇人と圧倒的に高いことである。^②女性が自ら選択して未婚の母を通す場合なら問題はないが、こういう黒人女性の多くは経済的な問題を

含めて、産むか産まないかを選択することすらできないのだ。

子を産む性としての母親の特権と悲哀を扱ったのが、トニ・モリソンの『ベラヴド』(Beloved, 1987)である。主人公のベラヴド(愛されし者)と呼ばれた女の子は、逃亡奴隷であるセスが殺した自分の娘の亡霊である。セスは、夫が休日にも働いて自由を買い求め、解放してやった老義母の元に二人の幼い息子とまだ乳飲み子の幼女ベラヴドを逃亡させた。その後、再び膨れたおなかを抱えて自分も逃亡し、衰弱と疲労で死にそうな目に遭いながらも赤子を出産し、その子と共に義母の元にたどり着く。一ヶ月足らずの親子再会の幸せがあっただけで、所有者の追っ手にかぎつけられると、セスは、子供たちが連れ戻されて奴隷にされるなら殺したほうがいいと判断する。この時殺された女兒がベラヴドである。我が子を惨殺する狂気の母親を見て、追っ手は帰っていく。我が子に対する母親のこの痛々しい行動は、その制度の残酷性を強調して余りある。この母親を非難できる人はいないだろう。私にはできない。

白人の乳母を命じられ、白人の子供にお乳を与えるために、雌牛のように自ら出産し続け、飢えた我が子に白人の子供が吸い尽くしたお乳を更に吸われ、ぼろぼろになって死んでいった女性の家事奴隷(ハウスニグロ)は数え切れないくらいいたはずだ。解放後も黒人女性は子供を産まされ続けた。長い奴隷制時代の中に、白人が手本を示した性モラルの乱れは、他に範を取ることのできない黒人男性の模倣するところとなった。婚姻は形だけのもので、男たちは、結婚によって生まれた自分の子供に責任を持ち家族を守るという習慣をほぼ忘れていた。解放後の黒人女性には——自分の産んだ子供を取り上げられる悲しみを味わうことはなかったもの——出産は食べさせなければならぬ口が増えることであり、子供は荷物以上のものではなかった。一九九〇年の米政府統計局の統計によると、黒人の女性世帯主家庭の比率は、実に五六・二%に達している。二世帯のうち一世帯がお父さんのいない家庭ということになる。¹⁵

おおぜいの弟妹がいるということは、年長の女の子の自由を奪うことでもある。『父の輝くほほえみの光で』(原題 *the Light of My Father's Smile*, 1988)の中で、スザンナの「恋人」ポウリーンは、家を出るまで、十人も子供を産んだ母

親の召使いだったと語っている。やがて、ポウリーンの元に男が通い始め、ポウリーンが子供を身ごもった時、母親は、これで娘を永遠に家に縛りつけられると喜んだという。しかし、ポウリーンは子供を堕ろそうと家出する。母親は娘を恨みながら死んだ。ポウリーンは、母親のセックスをこう表現している。

お母さんは心から楽しんだことがあっただろうか。養わなければならないもう一つの口が増えることを心配せず
にゆったりとセックスに浸ることができただろうか。¹¹

これはポウリーンがはじめて女性とのセックスを体験した後の感想だったが、女たちは、強姦されたのでなくても、絶えず妊娠の恐怖にさらされていたのだ。

『母の庭を探して』の中に「自分の一人っ子」というエッセーがある。女性が子供を持つことはすばらしいことではあるが、自分の時間を持ってないほど、自分の体を消耗させてしまうほどはよくないと言っている。女性が自分の選択で子供を産んだら、出産をはさんで自分の人生設計ができる、と利点を上げ、独特の質の違う体験ができるとも言っている。子供を持つことは女性にとって素晴らしいことである。作家としての自らを省みて、頭だけで考えて本を書いていた自分が、ひとりの人間を自分の中に取り込んだ、と変化を述べている。同じ妊娠、出産という女性の「仕事」がそこに「自分の意志」が加われば、こう変わるのだ。

アリス・ウォーカーは、作品を通してこの論を訴えている。神が女性に与えてくれた女性のみが享受できる特権を、苦痛から喜びに変えようと訴えている。

2. 隷従する心からの解放——美を愛でる伝統

次に、アリス・ウォーカーが黒人女性の解放に必要なだと考えたものに『カラー・パープル』で主人公のセリーに克

服させた卑屈な隷従する心からの解放があった。それは、この作品のテーマで、他でも縷々述べるが、ここではまず黒人女性に受け継がれている美を愛でる心を考えてみたい。

どうして黒人女性は、あの悲惨な歴史の中でその想像力を枯渇させずに持ち続けることができたのか。それを理解するのもアリス・ウォーカーの課題であった。絵を描く自由、詩や歌を作る自由、彫刻する自由、ものを織りなす自由、そういった人間が本来持っている芸術的精神を培う自由を奪われた黒人の祖母、曾祖母たちが、その状況の中で育み続け、子孫に伝えてきたものをアリス・ウォーカーは探る。そして、結論として、母親たちが伝えてくれたのは、可能性を大事にする心とその可能性をつかもうとする意志だったのだと理解した。

アリス・ウォーカーは、母親たちの教えを確実に学び取った。具体的に言うくと、黒人女性たちは、花壇を造り、そこに色とりどりの花を咲かせたのだ。これなら白人主人にも、農場監督にも、しかられることはない。お屋敷に持つて行けば喜ばれもした。無彩色に近い麻の袋をほどいて作られた服を着て、埃にまみれた生活をしながらも、黒人女性たちは、花を咲かせて、美を愛でる心を養っていたのだ。花ばかりではない。黒人の女性たちは、美しいものを求め、作り出す努力を怠らなかつた。ごく素朴に自分の芸術から手を離さないようにしてきた。

エッセー「母の庭を探して」によると、アリス・ウォーカーの母は、苦勞して教師になる夢を実現した人だが、花造りの名人としても近隣に名をなしたそうだ。ちなみに、父方の祖父は、納屋に絵を描き、それが褒められて自由の身になった人だという。

アメリカの黒人は、家族や部族の伝統から引き剥がされ、全く単独で奴隷として異国に連れてこられた。その過酷な環境に生きる黒人の中でも最下層の、女性たちにできたのは、女同士助け合っていくことだった。過酷な労働の間を縫って疲れた身体を休める時間を削り、女性たちは少しでも色の付いたぼろ切れや麻布をキルトに綴っていた。キルトは女同士の連携の象徴である。

『カラー・パープル』で、セリーは、義理の息子ハーポの妻ソフィアと「姉妹の選択」というパターンのキルトを

つくる。そこに夫の恋人でセリーの生涯の友となる歌手のシャグが、自分の黄色いドレスを提供してくれる。女同士、弱い者同士が持てるものを出し合って、心を一つにし、悲しみや苦しみやわずかな喜びを分け合いながら、ひと針ひと針縫い込んで、美しいものをつくっていった。女はどんな過酷な生活の中にも、必ず美しいものを見出し、つくりあげることが出来る。私は、そうして女はどんなに苛酷な状況にあっても人間らしさを失うまいと努力しているのだと思う。それが、子供を生かし、男に活力を与えているのだと思う。

「アメリカ女性文学の伝統と変化」という副題のついた『姉妹の選択』(Sister's Choice, 1989)とこう本で、著者のエイレン・シヨウウォーターは、アリス・ウォーカーが、キルトづくりを『カラー・パープル』という小説の中心的隠喩として使っていると指摘し、キルトの隠喩の活力は、「変化と再生の力」「統合と癒しの可能性」であると述べている。¹⁵私は、この調和を尊ぶ心が女性作家の姿勢についても言えるのではないかと思う。シヨウウォーターの本は、ジョイス・キャロル・オーツに捧げられたものだが、文中の「ものを書く私たち(女性作家)全員はある種の共同体活動に参画しているという信念で書いている」という言葉は、キルトのパターンのようにここにびったり当てはまると思う。作品のタイトル『姉妹の選択』は、明らかにアリス・ウォーカーの作品を意識したものである。アリス・ウォーカーは、『カラー・パープル』で女性の心を解放する手段としての美を愛でる伝統を重視し、弱い女性が支え合ってきた証としてのキルトを使って、女同士の連携の重要性を訴えている。

3. 身近な男性(父親、兄弟、伯(叔)父、夫)の暴力からの解放

三世に亘る奴隷制度の下では、白人男性の性のモラルが、黒人の奴隷たちの唯一のモデルであった。その女性が誰かの妻であろうと恋人であろうと、奴隷で、いや、黒人であるというだけで、相手の意志など無関係に何のともがめ立てもなく性のはけ口にされた。その女性の夫や恋人は、屈辱と悲しみに耐え、腹のムシが治まらなければ、犯した白人でなく妻や恋人を折檻した。

トニ・モリソンの処女作『青い目が欲しい』(The Blues Eye, 1970)は、青い目に憧れていた醜い黒人の少女ピコーラの物語である。ピコーラは、大好きだった父親に犯され、母親に折檻されながら、十二歳で子供を産み(死産だった)、自分が幸せになれないのは青い目がないからだと思ひこみ、占い師にだまされて神に青い目を授かったと思ひ込み、現実と非現実の間をさまよう哀れな少女である。これも一つの例であるが、物語が現実の反映だとすると、黒人男性には近親相姦に対する罪悪感が薄い。これも、長い奴隸制時代の遺産だろう。

身近な女性への暴力についても、黒人男性は自分たちが日常的に白人から受けてきた容赦のない暴力をまねした。鞭や手での殴打、あるいは凶器での身体の一部の切断等々。アリス・ウォーカーは、身近な男性から黒人女性が受けるこの暴力の問題を作品の中で多く取り上げ、何としてもこの残虐性を訴え、この恐怖から同胞女性を解放しなければならぬと考えた。

『カラー・パープル』でセリーが義父に犯された時、セリーは十三歳だった。病気の母親の代わりをさせられたのだ。セリーのお腹が膨れた時、母親はセリーを恨みながら死んでいった。生まれた子供は義父によってどこかに連れ去られ、二人目の子供も同じように処理された。セリーが先妻に先立たれた近くの土地持ちの男に嫁がされると、義父は今度は妹を狙い始める。セリーの元に逃げてきた妹は、ここではセリーの夫に狙われる。セリーは、最愛の妹を宣教師の一家とアフリカに送る。セリーの毎日は、先妻の四人の子供の面倒を見、畑仕事をし、ミスターと呼ばれている夫の性の相手をし、彼のいらだちを紛らすための殴られ役となることだった。

この作品中に、アリス・ウォーカーはセリーと対照的な登場人物二人を配している。一人は、義理の息子の嫁ソフィア。彼女は絶対に殴られるのを許さないという信念を持っていた。誇り高く生まれ、愛情深い働き者だったが、殴られたら夫であろうが負けてはいなかった。相手が市長であろうが不当な暴力には屈しなかった。だが、それが裏目に出て、市長を殴り返し、白人たちから半死の目に遭わされ、その後の十年余りを獄舎と、市長の家の住み込みメイドとして過ごさなければならなくなる。だが、男の暴力と、白人の権力とに真っ向から挑戦するソフィアの誇りと

勇気に感動した女性読者は、私だけではないだろう。大きな白人社会の圧力には勝てなかったが、ソフィアは、少なくとも愛する夫には自分を認めさせ、暴力を完全にやめさせることができた。

もう一人は、美人の黒人歌手シャグである。シャグも男が暴力をふるうことを許さなかった。しかも、セリーの夫がセリーに暴力をふるうのを止めさせるのにも成功している。シャグを愛するセリーの夫は、シャグが前妻の時と違って、セリーを愛していることを知り、シャグから非難されるとセリーを殴ることができなくなる。シャグの場合は、純粋に愛と女性同士の連携によって勝利を得たのだ。男と対決し、男を変えていくには、女同士が連携することが最高の策であることを実証している。

『父の輝くほほえみの光で』では、娘に対する父親の暴力が大きなテーマになっている。ムンドというメキシコの山中のインディアンと黒人の混血した人々の住む村で宣教師として派遣された文化人類学者の両親と共に思春期を過ごした姉妹の話である。そこで、姉のマグダレーナは、心の隅々まで理解しあえるムンドの少年マヌリエートと恋をした。「父親も娘のこの幸せを当然祝福してくれてもいいはず」と思えるセックスの喜びを知った後、彼女は父親にベルトで打たれる。黒い服を着て、乙女たちに純潔を説いている立場上許せないと思ったのだ。折檻される姉を覗いて見ていたおとなしい妹のサンナは、あんなに愛していた父親を素直に愛せなくなる。母親は娘に暴力を振った夫が許せない。奔放な性を楽しんでいた夫婦にはこれこそ拷問だった。父親は何ヶ月も妻に許しを請うた、結局憔悴しきった自分を誠心誠意看病する夫の愛に、母親は負けた。父親は、二人の娘と妻からの反発で、暴力に対する報いを受けた。ここでもアリス・ウォーカーは、女たち（ここでは家族）の連携が男（ここでは父親）の暴力に打ち勝つ様を描いている。

だが、この父親の行動が産んだ結果が私には、暴力以上に許せない。父親の罪の深さが露わになるのは、何年か経って、醜く太ってしまったマグダレーナが、昔の美しい少年の姿は見る影もなくなったマヌリエートに再会する場面である。彼は彼女を追ってアメリカにきて、ヴェトナム戦争に参加した。所属する部隊が爆撃され、ただ一人生き

残ったものの、彼は体中縫い合わされ、針金でつなぎ合わされていた。大統領から勲章をもらい、軍の命令で高校で演説をするために国中を駆け回っていた。再会した二人はまだ愛し合っていた。しかし、共に一夜を過ごしても二人は寄り添って眠るだけだった。アリス・ウォーカーはここで、暗黙のうちに、娘の愛をぶちこわした自分本位の父親の罪を訴えているのだ。

私たちは、女を従わせるために、奴隷時代に白人が自分たち奴隷をむち打ち、殴って仕事をさせたように、女を殴ろうとする。そんな男たちには、女たちが心の中で叫ぶ、「私たちは奴隷時代さんざん殴られたのよ」という嘆きの声が聞こえないのだろうか。

もう一例、初期の短編集『愛と苦悩の時』(In Love and Trouble, 1973)から「ドーターの好きだった子供」をあげてみたい。高校生の娘を持つ農夫の話である。彼には、子供のころ「ドーター(Daughter)」と呼ばれていた美しい姉がいた。彼はこの姉が大好きだった。この姉が彼を酷使している農場所有者の白人を愛したということで、父親から折檻された。姉は納屋に閉じこめられ惨めに狂い死んだ。彼があこのころの父親と同じくらの年令になった今、自殺した妻が残した可愛い一人娘が、妻帯している白人の男に恋をしているのを知った。娘が書いて、おそらく相手の男の母親から送り返された手紙を手にして、彼は、姉によく似た自分の娘を姉と重ね合わせる。

「奴隷時代を忘れたのか、黒人の敵を。白人男の売春婦め！」怒った農夫は、娘を納屋に閉じこめ、絞め殺して、ナイフで両方の乳房をえぐり取る。

黒人男性の敵は、奴隷制時代もその後も、白人男性だけだった。しかし、黒人女性には白人男性ばかりか、黒人男性、それも愛する家族までがしばしば敵でもあったのだ。

アリス・ウォーカーは、黒人女性の解放は、最も身近な肉親を含む黒人男性からの解放から始めなければならないというメッセージを送っているのだ。

4. キリスト教の神からの解放

奴隸制時代、キリスト教は、白人農園主が奴隸たちを支配するのに都合のいい宗教だった。奴隸たちに来世に望みを抱かせて過酷な現世の日常に耐えさせた。また、神のための集会ということで、ミサは黒人たちが労働を離れて大つぴらに仲間と集える希有な機会であった。こうしてキリスト教は互いの利益のために奴隸制社会に定着した。やがて黒人の牧師が生まれ、黒人の指導者が誕生し、SCLC（南部キリスト教指導者会議）のように黒人たちの人権復活を推し進める原動力の一つになった。この点ではキリスト教は黒人たちに役立った。だが、アリス・ウォーカーは、黒人社会に入り込んだ元来白人の宗教であるキリスト教に疑問を持った。

『カラー・パープル』で、シャグと神について話していたセリーは、神は自分が長いこと思い描いていたような「年取った白人の男」ではないことに気がついた。神とは誰もが持つて生まれてくるものであり、誰の心の中にもいるものだと理解する。ただ、「探そうとする人にしか見つからないのだ」というシャグの話に目が覚める。セリーがシャグを通して見つけた神は、人間の喜びを全て肯定する、平易な言葉で言うと、人間を幸せにするものを全て愛す、いものをわかち合う神だった。この「神」の概念なら日本人の私にも全く抵抗なく入ってくる。

白人の男の神を追い出したとき、セリーは今まで目に入らなかつた美しい紫色パープルが目止まった。白人の男の神を「目の玉」から追い払ったとき本当に目が見えるようになったのだ。愛されるようにふるまう、楽しいことを楽しむ（セックスも含めて）のも全て神の意に叶ったことなのだ。来世での幸福を謳い、キリスト教の神を追い出したとき、セリーは解放されたことを知った。

アリス・ウォーカーは六十年代にキング牧師の公民権運動に参加した。キング牧師は今でも彼女の尊敬する一人である。私は、彼女の尊敬の源は平和的に不正をただそうとするキング牧師の姿勢だったのだらうと思う。アリス・ウォーカー自身キリスト教を否定はしていないが、黒人たちがキリスト教信仰によって真実から目を背け、あるいは目を覆われている現実にはいらだちを感じていたのだ。固有の信仰を捨てさせ、キリスト教信仰が唯一絶対であるか

のような高所からの押しつけにもまた反対だったことが分かる。

『父の輝くほほえみの光で』で、ムンド人のマヌリエートの亡霊と話していたとき、偽宣教師であつた姉妹の父親は、ムンドの信仰と世界中の未開の地に布教している宣教師の意味を考えさせられる言葉を聞く。白人の宗教観に対するメッセージだろう。私もムンドの立場に立つと全く同感である。アリス・ウォーカーがこの言葉を死後のマヌリエートに口にさせたのは、そうでもしなければ、この批判が痛烈過ぎると思つたからだろう。

あなたは、本当に、ぼくたちが人は愛し合うべきだということを知らないと思つてたんですか？ 隣人は自身だということ、盗みは悪で、他人の持っている物を欲しがるのは自分を傷つけることだつても。ぼくたちは偉大なる精霊の一部で、そういう存在として愛されているのだということも。どこの誰がこんなことを知らないつていうんですか？

ぼくたちは天国も地獄も信じていませんよ、セニョール。ぼくたちは天罰なんてものも信じちゃいない。信じるのは、まったくそのつもりがないのに他人を傷つけてしまうことへの恐れと、自分が同じように傷つけられるのではないかということへの恐れです。¹⁶

布教の地に行った宣教師が、もし聞く耳を持ったならば、おそらく処々で耳にしたに違いない言葉であろう。『カラー・パープル』でもそうだったが、宣教師たちは、現地でアメリカの文化やキリスト教信仰を伝えてくるというよりは、地元の文化を理解し吸収しているということに力点が置かれて書かれている。これがキリスト教に対するアリス・ウォーカーの態度だったと解釈していいだろう。マヌリエートの言葉には哲学的な響きさえある。

こういう形でアリス・ウォーカーは、物語の中でキリスト教の神からの解放を訴えた。

5. 白人の求めるステレオタイプの黒人像 or 無遠慮な白人の依存からの解放

白人作家が描き、白人読者に受け入れられる黒人像は、黒人側から見たらその独りよがりな浅薄さがいらだたしくてたまらない場合が多いだろう。黒人作家はだれも、黒人大衆に代わってそのいらだちを代弁しなければならぬという使命感を背負っているに違いない。この過ちを暴くことも、アリス・ウォーカーが作家として「書きたいこと」だったに違いない。一例を挙げてみたい。

楠 本

『カラー・バープル』の終わりの部分で、ソフィアが、残りの刑期を市長の家にメイドとして仕えていた間に世話をした市長の娘エレノア・ジェーンが、赤ん坊を抱いて、自由になったソフィアを訪ねてくる場面がある。エレノアは、かつての乳母のソフィアにひとこと「かわいい」と言ってもらいたいのだ。だが、作者アリス・ウォーカーは、決してソフィアにそう言わせなかつた。

ソフィアが本音を漏らすこの二、三ページの描写は、何万人もの黒人のどに何百年にも亘って引つかかっていたつかえを取り、その何百倍の白人を自らとその祖先たちの洞察力のなさ、身勝手さに赤面させたことだろう。この場面をリライトしてみた。

この子可愛いと思わない？

こんな賢い子供今まで見たことがないでしょ？

おまえ、この子が可愛くないの？

畳みかけて必死に肯定の答えを求める若い母親エレノア・ジェーンに、ソフィアは、言い張る。
いいえ、お嬢さん、私はあんたのその息子を愛してなどいません。

エレノアは、泣き出す。

私はおまえに心を許していた、おまえがいなければ、私はあの家で生きていけなかった。

それが、どうしたというんです？ 私はあんな所にいたくはなかった。自分の子供たちと離れていたくなかった。私はこの子について何も感じていない。愛してもいないし、憎んでもいない。

腑に落ちないエレノアはいう。

私の知っている他の黒人の女はみんな子供が好きよ。

確かに私も子供が好きさ。だが、あんたらの子供が好きだという黒人女はみんな嘘をついているんだよ。……黒人の中には、白人が怖いから、綿繰機であつてもそれを愛しているという人がいるからね。

またソフィアは、もし、誰かが彼女を「アーント（小母さん）」などと呼ぼうものなら、「いつあんたの母さんの妹が黒人と結婚したんだい？」と聞き返した。アリス・ウォーカーは作品中で、『風と共に去りぬ』で定着した太つて気だてがよく自分を捨てて白人に尽くす黒人女、「マミー」のステレオタイプな黒人像を、きつぱりと切り捨てた。『アンクル・トムの小屋』（*Uncle Tom's Cabin*, 1852）の「アンクル・トム」の際限のない善良さにどれ程多くの黒人たちが苛立ち、一旦定着したそのイメージを白人たちから払拭するのに、どれだけ多くの黒人たちが奮闘しなければならなかったか、今もしているか。それを考えると、ソフィアというキャラクターを創造し、以上のことをはっきりと登場人物に言葉で言わせたアリス・ウォーカーの勇氣と功績は測り知れない。

三章 解放された黒人女性

1. 飽くなき性の探求

アリス・ウォーカーは、女性を解放するといっても、男性無しの、男性と対立した潤いのない女性の世界を描こうとしたのではない。彼女の女性解放運動は、同時に飽くなき性の探求であった。

(1) 処女性 (virginity)

アリス・ウォーカーの性(セックス)に対する考えをまず処女性(ヴァージニティ)の定義から考えてみたい。『カラー・パール』で、作者はセリーに向かってシヤグに二回、「あなたはヴァージンだ」という言葉を使わせている。

セリーの夫は、シヤグがもし人間として彼を尊敬できれば結婚してもいいと思う唯一の男性であった。彼はシヤグを一生愛し続け、シヤグは彼に性的満足を感じている。その夫との性生活でセリーは彼が排泄するぐらいにしか感じないという。セリーが二人の子供を生まされた義父ともそうだったと聞かされたシヤグは、「ミス・セリーあなたはまだヴァージンじゃない」と言う。義父には強姦され、結婚した夫は、セリーをただの醜い召使い位にしか思っていない。そういう夫との夫婦生活にセリーが喜びを感じられるわけではない。もう一カ所は、シヤグに「手ほどき」を受けた後しばらくしてである。夫は愛の行為らしきものはするが、依然としてセリーはなにも感じないという。「あなたはまだヴァージンなの?」と、きかれ、セリーは、「そう思う」としか応えられない。

ウェブスターで、調べると、人(動物)を表す *virgin* には以下のような意味がある。

1. キリスト教社会の中で特別の地位を与えられている未婚、または貞淑な女性。
2. 教会に住み神に身を捧げている女性
3. 純潔さと貞淑さで評判の若い女性

4. 未婚の女性
5. いわゆる処女
6. マドンナの絵
7. 動物のまだつがってない雌

シヤグが使っている意味はどこにもない。セリーは十三歳で犯されて二回も出産している。セリーをこう呼んだシヤグによると（とりもおさず作者ウォーカーの主張だが）、「未だに性的快感を体験していない女性」は全て〈ヴァージン〉なのである。セリーを〈ヴァージン〉でなくしたのは、同性のシヤグだった。

アリス・ウォーカーがこの言葉に与えた新たな定義に喝采を送りたい。こういう定義を与えることによって、虐げられ、隷属させられているおおぜいの女性が救われ、新たな性の喜びに目覚め、幸せに生きられるだろう。

(2) 性 (sex)

アリス・ウォーカーが、セックスをどう捕らえているかは、端的に説明できる。まず快感を与えてくれる相手が同性か異性かは関係ない。性は楽しむもので人間に授けられたこの喜びを楽しむことに罪悪感はない。しかも、相手が異性の場合でも同性の場合でも、隔てなく対等に考えているのである。

『父の輝くほほえみの光で』は、女性同士のセックス・シーンから始まる。愛し合う二人は心ゆくまで性の快感を味わい満足する。二人は、主人公の一人スザンナと、母親の奴隷になることから逃れてきたポウリンである。スザンナの夫は、夫婦の仲が冷えてきたころ、レストランで妻に近づいてきた女性がレスビアンだとひと目で分かり、恐怖を感じる。自分の何かに妻が満足できず、自分が与えられないその肉体的喜びを妻に与えられる女性が現れたのだ。男のみが唯一の性の支配者でなくなつたとき、女性の性は一步解放に近づいた。

(3) 愛の二面性

アリス・ウォーカーは、異性ととの関係で二つの側面を強調している。もちろん肉体的な面と、精神的な面だ。作品に描かれた恋人たち相互の関係は、精神面から始まっている。この世に二つとない自分の魂と共感できる魂を持った相手とのつながりである。女性は（男性も）、そういう魂を持った人と出会い、愛の至福の時を過ごす。しかし、それは永遠には続かず、やがて二人の關係にひびが入る。アリス・ウォーカーの描く作中人物たちでは、男性が気づかないうちにそのひびの兆しが女性の心に生ずる。作品で見てみよう。

『わが愛しきものの神殿』は、複雑な人間關係の広がりを持っているが、二組の男女の愛がその中心をなしている。ファニーとスウェロ、カーロッタとアーヴェイダの二組である。ファニーが夫スウェロとの關係に間隙を感じ始めたのは、彼が別の女性カーロッタと關係を持ったことだった。夫がそれを口にし、続いて、「彼女は僕にとって何でもなかった」と言ったとき、ファニーは「女として裏切られた」と感じたのだ。しかし、スウェロがそれに気づいたのは、後にファニーから「あの時あなたが嫌いになったのよ」と告白された時だった。

また、『父の輝くほほえみの光で』の末娘サンナの心に、ギリシヤ人の夫ペトロスとの關係に終わりを告げる最初のひびが入ったのは、彼の故郷ギリシヤの小さな島で見てしまった彼の人間的な情の欠如のせいだった。アリス・ウォーカーは、ここでも精神面を先行させている。島にある小さな教会で教会守をしている女こびとへの思いやりのなさ、かつて女性が縛りつけられて「石打ち」の刑にあったという斜めに突き出た石の梁に対する彼の無関心が許せなかったのだ。だが、ペトロスには何が妻の心を離れさせたのか分からない。心配していた故郷の貧しさも田舎者の母も受け入れてくれ、すばらしい愛の交わりもあつたというのに。

アリス・ウォーカーの描く女性の心にひびが生ずるのは、相手に絶対的な愛の——人間のみでなくこの世に生を受けたありとあらゆるものを包括する愛の——欠如が感じられた時だ。それを契機に、至福の愛の時を共有した男女の仲が崩れてゆく。『アメリカ黒人女性作家論』で、作者加藤恒彦氏は、「人生上の関心の共有」¹⁾という言葉を使って

いるが、私はその共有する関心の融合度を「愛」と限定したい。その方が、以下で述べるアリス・ウォーカーの「女神」という思想に近づきやすいからである。

2. 「女神」への道

アリス・ウォーカーは、この「愛」を持ち続けた女性と、愛の生活を全うし、最後まで、おそらく性的な関係が終わつてからも、女性を失望させずに愛が続いた一人の男性を描いている。具体的に上げると、『わが愛しきものの神殿』のリシーの愛人レイフである。レイフは、リシーが最後まで添い遂げた夫ハルの親友で、独り者だった（先に引いたスウェロの叔父である）。リシー、ハル夫妻とレイフ、この三人の関係は調和のとれた三角関係だった。リシーとハルは幼友達で、成人して結婚してからもずっと愛し合つて暮らしてきた。だが、妻リシーが出産するのに立ち会つた夫のハルは、その苦しみを見るのに耐えられず性的に不能になってしまふ。妻リシーと親友レイフとの関係が始まつた後も、ハルはリシーを愛し続けた。親友レイフが先に亡くなった。その時の妻リシーの悲しみようから、ハルは、妻が自分よりもレイフを深く愛していたことを知つて嘆き悲しむ。この三者の関係は、ストーリーの流れからははずれた一挿話に過ぎないが、かなりの紙面が割かれている。

私はここに、アリス・ウォーカーの思想の鍵が隠されていると思う。リシーは、「あの人（＝レイフ）だけが私を女神として愛してくれた。実際、私は女神だった」と言つてる。象徴的な言葉である。リシーは、自分が五十年という長い年月に逆らつて生きてきたと口にする。一見、精神錯乱者とも思えるような女性である。アリス・ウォーカーの作品の中で最も突飛な人物に見える。だが、リシーは、精神的に弱い夫のハルを好きな絵の道に進ませて支え続けた。性的に不能になつた後も夫婦として添い通した。

リシーは、あらゆる生あるものを愛した。太古から何万回という生を生きてきた。黒人でも、白人でも、インディアンでもあつた。先祖ばかりか、自分の魂が共感できるあらゆる生あるものを愛し、正義感から怒つた。何千年も動

物園で飼育され、投げ与えられた肉を何の感動もなく食べるほど落ちぶれたライオンの姿に悲しみを示す。その時は、リシーはライオンになっているのだ。気品とどう猛さを持ったライオンに。ある時は白人になっただけで、白人がどんなに物事に心を閉ざしている孤独な存在かを体験できる。またある時は、男性にもなっている。

この広い深い愛、これを持った女性、それがアリス・ウォーカーの言う「女神」である。そして、作品の行間で女性にはこの「女神」の要素があると訴えている。その「女神」を受け入れ愛してくれる男性、それこそ愛の全うできる相手である。だからリシーに、「あの人は私を女神として愛してくれた」と言わせたとき、私は、それがアリス・ウォーカーの男女関係の集大成だったのだと思いたい。

3. 理想の男性像

アリス・ウォーカーの作品中の女性は、肉体的な愛が満たされる限り関係を続けていくことを拒まない。しかし、結婚という形を取るかどうかは別問題である。満たされない肉体関係なら、女性は、人間的に愛することのできる同性の恋人を持つ。どんなにすばらしいセックスを共有できる異性の相手でも、『カラー・パープル』のシャグのように、人間愛や、人間的な強さのない相手（セリーの夫のような人）とは結婚しようとは思わないし、結婚していても心にひびが入った時点で愛は覚め破局に向かう。

難しいのはたいがい女性の心のひびに男性が気づかないことである。どこか違う相手の反応に男性は苦しんだり、暴力を振るうようになったりする。今まではすばらしかったセックスも、女性が楽しめないから男性はピエロを演じていることになる。妻に暴力をふるった後に、妻の気分や心の痛みも思いやらずに交渉を求める世の夫たちへの、妻たちからの仕返しと考えるとらいだろうか。

はつきりしているのは、これほどセックスの喜びを礼賛しておきながらも、あくまでアリス・ウォーカーが精神的なつながりを、肉体的なそれに優先していることである。女が真に幸せになるためには、男が変わらなければなら

ない。男を変えるためには女が変わらなければならない。アリス・ウォーカーは、それを『カラー・パープル』のセリーの変化が夫を変えていくことで明らかにしている。

アリス・ウォーカーはたくさんの詩も書いている。女性のこの高い理想に応える男性像が描かれている詩を、『おやすみ、ウィリ・リー、あしたまた』(*Good Night, Willie Lee, I'll See You in The Morning*) に収録されているものから二篇風呂本倅子女史の訳であげてみたい。

「許して下さい、わたしの賛辞が」

わたしにはわかつている、必要なのは

長い腕の

種をまくひらいた手が

わたしを抱く

充分に満足のゆく愛

「暖かいキス」

わたしの悪夢に

いっしょに戦ってくれる

滑らかで

強い木の幹のように

がっしりした肩 ¹⁸

この二つの詩に歌われた条件を満たす人が、アリス・ウォーカーの（作中人物たちの愛の始まりと終わりを見ていくと）理想の恋人のようだ。先の詩では、健康な、労働を愛する男性で、肉体的に満足させてくれる人であり、後の詩では、相手の苦しみや悩みが分かる、聡明で心の暖かい、強靱な意志と体を持った人である。こういう相手なら女性性は恋人の強さに頼りながらも、自分の力を放棄するのではなく、自主性をもちながら、男性との満足のいく関係を生み出していけるのではないか。恋人である男性の強さは、女性を抑圧したり、屈辱的な地位に隷属させるためののではなく、〈悪夢〉と戦う女性の苦痛を和らげるために用いられるべきなのだと言っている。アリス・ウォーカーが偉大な先輩と仰いだゾラ・ニール・ハーストンに通ずる思想だ。

そして、すでに見てきたように〈悪夢〉は、アリス・ウォーカーの場合、自分と自分の身の回りの者たちだけに關するものではない。目は広く世の虐げられた人々の救済に向いていた。『喜びの秘密』の最終章で、タシが、処刑される前日、夫のフランス人の愛人に宛てた手紙にそれが表れている。（タシは、『カラー・パープル』で、セリーが義父に犯されて産み、宣教師にもらわれた二人の子供のうちの長男アダムが結婚した相手である。）タシは、こう訴えた。私は、今も昔もキリストを愛しているし、愛してきた。しかし、キリスト一人の苦しみにだけ焦点を当てると、いかに多くの人々の苦しみが取り残されるかに気づいた。そこで、黒人説教師の夫に説教の中でその話をしてほしいと頼んだ。今、現在この地球上で「絶対的な権力と拷問の前に投げ出される無力な大人の女と小さな女の子の苦しみ」を説教の中で話題にしてほしい、女性性器切除手術を受けた私の経験を話題にしてほしいと。しかし、夫は、私的なことは話題にできない、何より恥ずかしいと語った、私の心が夫から離れたのはその時だった、とタシは告白している。アリス・ウォーカーにかかったら、理想の男性は神以外にはいないと思う人がいるかも知れない。しかし、上記の例で見ても、根本的な人間愛の有無と、それを行動で表す勇気の有無だけの問題であることが分かる。

4. 女神の使命

アリス・ウォーカーの「女神」としての使命感は、全ての虐げられている者の救済へと向かっていった。『カラー・パール』が、その言葉づかい、黒人男性の描き方などで黒人批評界から様々な非難を浴びたとはいえ、ウォーカーは、確実にその手応えをつかんでいた。誰も書いてくれなかった彼女らの真実がはじめて描き出されたことを感謝する手紙が続々と舞い込んだのだ。それはアリス・ウォーカーにとって大きな自信と励みであった。

「女神」アリス・ウォーカーにとっては女性の解放運動は、世界中の全ての女性の解放を意味した。以下の数項を頂点に世界中に解決されなければならない女性の問題は山積している。

- ・ アラビアやアフリカの大半で今なお行われている女性性器クリトリス切除
- ・ スラム街の女子
- ・ ポルノや児童虐待
- ・ 家庭内暴力

女性の幸福を求めて闘うアリス・ウォーカーを当然フェミニズム運動の流れの中で位置づけようとする研究がある。現在アメリカには、ブルジョワ・フェミニズム、ラディカル・フェミニズム、マルクス主義・フェミニズム、社会主義・フェミニズム、ブラック・フェミニズム等々があるというが、彼女がどういふ点でどの流派に属するかは他の研究に任せるとして、ここで指摘しておきたいのは、ウォーカーの次の言葉である。

黒人女性が女性（解放）運動から自分たちを切り離すということになれば、彼女たちは、世界中の女性に対する責任を放棄することになる。¹⁹

『喜びの秘密を持つ』でアリス・ウォーカーが女性性器切除の問題を真っ向から取り上げたのは、右で引用した信

念を実践するためだった。そして、実際にこの危険な手術をオリンカ族の娘タシに受けさせたのだ。著者による解説では、今も九千万から一億の女性がこの手術を受けているという。「ケニヤの少女たちは、汚いガラスの破片や、カンの蓋や、錆びたカミソリや、鋭いナイフの刃先で、ここでツンガと呼ばれる性器切除を専門にする女によって強制的に女性性器を切除されている」と言っている。『カラー・パープル』が刊行された一九八二年に、ケニヤではこれが原因で十四人の少女が死亡しており、その年大統領は法律で禁止したそうだ。しかし、いくら法律で禁止したところで、その風習は消えず、他の諸地域同様今も続いているということである。誰かが一石投じなければならぬ。この悲惨な風習の実態を知ったアリス・ウォーカーは、何としても同じ地球上に住む文明社会の人々にこの実態を知ってもらい、動き出してもらわなければと思ったに違いない。

そこで作品の主人公タシにこの忌むべき手術を受けさせた。タシは、早くキリスト教徒になっていたという理由で初潮前の少女が受けるこの儀式を免れていたのに、アダムたちがアメリカに帰るとき同行せず、民族意識の目覚めから、成人してからは更に危険なこの手術をあえて受けた。手術後、生理時の経血は通りが悪く十日も激しい腹痛が続き、四六時中洗ってもとれない悪臭に苦しむことになった。手術と同時に朗らかだったタシは死んだ。もう以前のように活発に走り回ることもできず、軽蔑していた村の女性たちのように摺り足でしか歩けず、悪臭を放つ自分を卑下しつつ生きるしかなかった。タシはこうして女性が隷属した存在にされるのだと悟った。

アダムはアフリカに婚約者タシを訪ね、オリンカ族の娘としてのタシと結婚した。タシの悪臭が治まったのは、アメリカで医者にもスポイト洗浄してもらってからであった。しかし、セックスは苦痛以外の何ものでもなかった。それと、出産の苦しみ。タシが出産したとき、医者たちはその部分を見て嘔然とした。夫のアダムが異議を申し出るまで見学が続いた。生まれた子供は脳障害を持っていた。

アメリカ人と婚約したのだからタシはアメリカ人となるのに、身をもってオリンカ族の女の運命を分かち合おうと、自分の意志で手術を受け、生きる喜びを剥奪されたアフリカの女たちの苦悩を共にしたのだ。タシは、この儀式で出

血が止まらずに死亡した姉のことを思った。いったいこれは誰のためにすることで、誰がいけないのだろう。極度に疲労したタシの神経は正常さを失い精神科医の治療に頼らなければならなかった。

老年にさしかかったタシはアフリカに飛んで、神様のように崇められ、白いシーツを敷いたベッドで余命を送っているツンガ（手術を行う女）のマリッサを殺害する。老婆の殺害は、タシの国家に対する挑戦だった。タシは裁判を受け、「国家の貢献者」たるこの老婆の殺害は死刑に相当するという判決を受け、銃殺刑に処せられる。

アリス・ウォーカーは、この裁判を描いて、この手術を男たちがどう受け取っているかを判断しようとしたに違いない。世の男たちの男性優位主義に挑戦し、自ら答えを出した。タシを死刑にしたのだ。因習にこだわる男社会が、女性に対する耐え難い虐待を肯定していることを明示したのだ。現状を反映させただけでなく、この非人間的な判決に男性の良心が疼き、何かの動きが生ずることを期待したのに違いない。エッセー集『勇敢な娘たち』(Anything We Love Can Be Saved, 1997)に、一九九六年四月ガーナで開かれた「ストップFGM（女性性器切除）」という会議に参加した時のことを書いているが、当該国が内部から動き出していることが分る。

アリス・ウォーカーは文学作品に余りに目的を持たせすぎているか、と思うこともある。しかし、世界中の虐げられた者の救済を視野に入れて作品を書いているアリス・ウォーカーの目的は救済であり、それ自体悪いことのはずがない。ただ非難されるとすれば、救済を訴える作者の声が大きすぎることかも知れない。あるいは、以下述べるように、性急すぎることかも知れない。『父の輝くほほえみの光で』では、作品の素材を文化人類学者の研究から取っていることに感謝しながらも、調査するだけでこれほどの女性に対する虐待に声を上げようとする文化人類学者たちにもどかしさを通りこした憤りを表明している。²⁰アリス・ウォーカーとしては、実態を知った知識人たちにその人間としての良心から行動して欲しいのだ。

何事であれ因習として続けられていることには何かの意味があるに違いない。中国には、唐末に起こり、実に中華民国になるまで千年以上も続いた、女兒の足を縛って大きくさせない纏足という風習があった。小足は女の美と徳

と高貴さの象徴であり、その社会通念のために上流階級の健全に生まれた少女たちが不具者にされてきたのだ。その意味を考えると全く男の側の都合だったことが分かる。馮驥才ふうきさいの『纏足』^①で、「女性の蒸れた足の臭いとその赤ん坊のような小さな足の感触が男にはたまらない快感だった」という一文を読んだとき、その状況を想像して私は、何とも言えない気持ちになった。妻が夫に与えた快感の代償は何だったのだろうか。夫からの保護（これは女性が力を奪われ、隷属するしか能のない存在にされているということだ！）と、（その社会にだけ通用する）小足を持つ「名誉」だけである。残念なことに、そういう風習の中では、人はその価値観に支配され、被害者である女性自身がその「名誉」にしがみついてしまうのだ。

では、女性性器切除の意味は何だろう。タシが語るツンガの説明に明らかにされている。

性器切除されていない女は、誰でもはける靴のようなもので、きちんとした女は切除されて縫い合わされているものだ。夫は何か月、時には何年もかかって固いその縫い合わされた部分を押し広げるのを楽しむ。男たちは女がもがき苦しむのが好きだ、というのだ。妻のあげる苦痛の悲鳴が夫には快感だという。「苦痛」が「快感」とはどういうことだろう。しかし、因習とは恐ろしいものだ。作品にこう書いてある。

女たちは今日でもまだ、出産後、前よりもっときつく縫ってもらいにツンガの所に戻ってくる。ゆるかったら男に十分喜びを与えることができなからと言って。^②

これは当然、妻の自由なセックスの防止になる。妻たちを貞淑にしておくには役立つだろう。だが、これはあくまで男の論理だ。妻の喜びはどうなんだろう。最後に、考えたくないが、自ずと出産が減り、また、出産で死ぬ産婦が多くなるということで部族内の人数を都合のいい数に押さえておくことに役立ったのではないか。この恐ろしい現実気づかせ、止めさせられるのは女性しかない。アリス・ウォーカーは作品の中でその方法を探った。

タシはアメリカ人のアダムの妻、ミセス・タシ・エヴリン・ジョンソンとして、裁判を受ける。「タシ」、「エヴリン」と二つの人格を持った女性を描き分けてきたアリス・ウォーカーの意図は、タシをアフリカで前近代的な手術を受けたアメリカの女性とすることで、この出来事を後進国の問題として文明国の人々に切り離させないようにする効果を狙ったのだ。

それにしても、この本のタイトルは実に多くを語っている。このタイトルの意味を知ることが、アリス・ウォーカーが、この本で「何を書きたかったか」を知る鍵になるだろう。扉頁に象徴的なその言葉が書かれている。

黒人には喜びの秘密があると信ずる人々がいる。それがあから、黒人は精神的に、道徳的に、肉体的にどんなに荒廃させられても耐えることができるのだと。

この扉頁の言葉に込めた皮肉がこの本のタイトルになっているが、これだけでは理解に難しい。この部分は以下に引用した本文中のタシの言葉で明確になる。タシが、オリンカ族の娘と読んでいた、生涯その地に住んだというある白人植民地主義者の女性作家の書いた本の一節に怒りをぶちまける場面である。

でも、これは一体どういうこと？ と私は聞く。この作家が書いている喜びの秘密って？ あなたも黒人、私もそうよ。だからこの人が話しているのは私たちのことでしょ。でも、私たちは知らないわ。……あなたは知っている？

ああ、と私は言う。あの人食いの植民地主義者たち！ なぜ私たちの土地を盗み、金鉱を掘り、森の木を切り倒し、川を汚し、私たちを奴隷にして農場でこき使い、ファックし、私たちの肉を貪り食うだけにして、放っておいてくれないんだろ？ なぜ私たちがどれだけ多くの喜びをもっているかなどということまで書かなければな

らないの？²³

なぜ切除手術を受けた女性のこの苦痛が、黒人にはセックスの喜びであるなどと勝手に決めつけるのか、とタシと友人は憤っている。扉頁の鋭い皮肉が解明されている。実体を知ろうとしないで、勝手な憶測をし、同じ地球上の女性が被っている苦痛と屈辱を思いやろうとしない、白人（女性）たちに対する憤りであり、その鈍感さの告発である。それはまた、黒人を捕獲し船に積み込んだとき以来の、また、植民地支配した黒人・アジア人を未だに同じ感情を持った人として理解することのできない白人社会への痛烈な批判でもある。

アリス・ウォーカーは闘う女神として——人種の独自性を認めた上で——同じ人間として「自分なら」と考えるだけでなくに分かる簡単なことが分からない、いや、分かるうとしない相手に向かって、あえてゼウスの電光を投げつけているのだ。

結び

アリス・ウォーカーは、以上見てきたような視点で自分の書きたいものを書き表してきた。虐げられた者全ての悲しみを思いやる女神のような広い心で。しかし、以上見えてきて分かったように、彼女の筆は決して感傷には走っていない。どんな権威に対してもひるむことなく真つ向から闘いに挑んでいる。現実を直視して、人々を動き出させようとして筆をふるっている。

アリス・ウォーカーが作家の役割は「人間の、私たちの命を救うことです」と言ったとき、私は、「私たち」というのは黒人女性のことだと思っていた。だが、そこには世界中の虐げられている女性、世界中の人間、現在・過去に及ぶあらゆる差別と虐待に苦しむ人間が含まれていた。人間ばかりではない。動物から植物に至るまでの「生」ある

もの全てが含まれていたのだ。アリス・ウォーカーの闘いの諸相を概観してみたが、その闘いを支えたのは、「黒人」で、「女性」という二重の「ハンデイ」を背負った黒人女性作家以外にこの大役が果たせる者はいないという自負から生まれた使命感であった。そして、その雄々しくも哀しい自負が感動の源なのだ。

注

- ① *In Search of Our Mothers' Gardens: Womanist Prose*, Alice Walker, The Women's Press, 1983, p.8
- ② *Hoses Make a Landscape Look More Beautiful*, Alice Walker, The Women's Press, 1985, p.27
- ③ 「万人の抗議小説」『黒人文学全集第11巻』早川書房 昭和四五年 所収 関口功訳 二二三頁
- ④ 『姉妹の選択』ロ・シヨウォールター著 佐藤宏子訳 みすず書房一九九六年 一八二頁
- ⑤ *The New Masses* 25, Oct. 1937
- ⑥ 『ハーストン自伝 路上の砂塵』ゾラ・ニール・ハーストン著 常田景子訳 新宿書房 一九九六年 二五一頁
- ⑦ 補遺「世界をあるがままに見る」『ハーストン自伝 路上の砂塵』所収 三三九頁
出版者側の都合で初版に組み入れられなかったものが、一九九〇年版で Henry Louise Gates Jr. によってつけ加えられた。
- ⑧ *In Search of Our Mother's Gardens*, p.7
- ⑨ 『二グロ・ダンス・抵抗 一七一一九世紀カリブ海地域奴隷制史』ガブリエル・アンチ・オープ著 石塚道子訳 人文書院 二〇〇一年 九〇〜九二頁
- ⑩ 「奴隷制度を論ず」『黒人文学全集第11巻』所収 黄寅秀訳 一七〜一八頁
- ⑪ *Risking the Future: Adolescent Sexuality, Pregnancy, and Childbearing*, edited by Cheryl Hayes, National Academy Press, 1989
- ⑫ 『アメリカの二つの国民』アンドリュース・ハッカー著 上坂昇訳 明石書店 一九九四年 一二六頁

- ⑬ 同 三三六頁
- ⑭ *By the Light of My Father's Smile*, Alice Walker, Ballantine Books, 1998, p.143
- ⑮ 『姉妹の選択』 二六三頁
- ⑯ *By the Light of My Father's Smile*, pp.164-165
- ⑰ 『アメリカ黒人女性作家論』 加藤恒彦著 御茶の水書房 一九九一年
- ⑱ 「愛と革命をつなぐために——アリス・ウォーカーの詩とその変革のビジョン」アリス・シャーパー著 風呂本淳子訳 『わたしたちのアリス・ウォーカー』 河地和子編著 御茶の水書房 一九九〇年所収 二九八〜二九九頁
- ⑲ *In Search of Our Mothers' Gardens*, p.379
- ⑳ *By the Light of My Father's Smile*, pp. 203-204
- ㉑ 『纏足』 馮驥才作 納村公子訳 小学館文庫 一九九九年
- ㉒ *Possessing the Secret of Joy*, Alice Walker, Pocket Books, 1992, pp.223-224
- ㉓ 同 pp.271-272

その他の参考文献

- The Way Forward Is with a Broken Heart*, Alice Walker, Random House, 2000
- Alice Walker*, Maria Lauret, Macmillan Press, 2000
- Negroes and The American Revolution*, William Z. Foster, 1954
- 『黒人として女として作家として』 クローディア・テイト編 高橋茅香子訳 晶文社 一九八六年
- 『アフリカン・アメリカンの文学』 荒このみ著 平凡社 二〇〇〇年
- 『勇敢な娘たちに』 アリス・ウォーカー著 柳沢由美子訳 集英社 二〇〇三年
- 『トニ・モリスン』 木内・森編著 彩流社 二〇〇〇年